**（フロントランナー）ライター・コラムニスト、ブレイディみかこさん　現代社会の風景を描く**

ぞ。

[メモする](javascript:void(0);)

　多様性ってやつは、ややこしい。でも楽ばっかりしてると無知になる――

　お説教臭い話も、この人にかかると、みんなが考え込まずにいられない魅惑的な問いに変身する。硬質でいてユーモラス、リズム感に満ち、時に先鋭的、時に詩情豊かな文体の力だ。

　昨年からベストセラーが続く『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』の舞台は英国の公立中学校。移民の増加や人種差別、貧困の問題が複雑に絡み合う中、一人息子とその友人たちはぶつかりあい、悩み、もがきながらも、乗り越えていく。

　「想定のないところから、ひゅっと答えを見つけてくる。『生きる英知』みたいなものに、むしろ私たち大人の方が教えられる気もします」

　欧州社会の変化の足元を伝えるコラムが注目されたのは数年前。行き当たりばったり、成り行きだと苦笑する。

　１９８０年代初め。福岡県有数の進学高では、授業をさぼりバンド活動にいそしむ「不良」だった。英国のパンクロックにあこがれた。お昼のパンがろくに買えない貧しさを恥じ、ダイエット中でとおどける自分とは対照的に、海の向こうのスターたちは労働者階級の出身を誇りにしていた。

　大学へは進まず、バイトでお金をためて渡英を繰り返す。やがてアイルランド人の男性と結婚。英南部のブライトンで保育士をめざすのは、２０００年代後半、４０歳を過ぎて出産してから。それまで大嫌いだった子どもという生き物が、最高に面白くなった。

　貧困地域の慈善施設内にある無料託児所で見習いをし、底辺社会の現実を見た。暴力やドラッグや虐待が果てしなく連鎖する環境。自分を励ますために、ブログに文章を書き始めた。

　幼いころ通った託児所へ戻り、虐待が疑われる問題児と向き合って、たたかれたくなければ堂々としていなさい、と諭す女子学生のこと。

　不自由な体と心の病を抱えながら、凶暴児を受け止め、愚鈍なまでに実直な言葉でほめて、見事になつかせてしまう男性ボランティアのこと。

　いつか自分が物を書いていくかもしれないと「予感」した２編である。

　それらを収め、のちの保守党政権による緊縮財政の影を描いた『子どもたちの階級闘争』（１７年）は高く評価された。著書は１０冊超。論客としても期待されるが、そのつもりはない。

　「私がやりたいのは、主張でなく、現代社会の風景を描くことなんだろうと思います。政治や経済の動きが、どんなふうに人々の生活にしみ出ているか。心模様に表れるのか。自分が暮らす地べたから、見つめていきたい」

――『ぼくイエ』、すごい反響ですね。

　英国にいると誰も知らないので何も変わりません。でも帰国するたび驚きました。里親に預けた子の成長に目を見張るような。読者、書店員さん、版元のチームの方たち「みんなの本」だと思っています。

　――これまで出した本の編集や担当の方たちも訪ねましたが、活躍を喜ぶ口ぶりが熱かったです。

　いやいや。皆さん、本当にお世話になりました。

　確かに、人文書売り場のマイナーな著者だったから驚いているでしょうね。これ、卑下しているわけでも何でもなく、自分の個性と思ってきましたから。

　■先生が「書け」と

　――本を読み、書くことは、昔から好きだったのですか。

　ええ。実家は本を読むような環境ではなかったのですが、近くにいた祖母の所に本があった。両親の仲が険悪になると、私はそこへ避難していましたね。

　中学高校の国語の先生の存在も、今思えば、大きかったかもしれません。

　中学は校内暴力で荒れていて、要領よく成績のいい私には悪い友達もいた。そんなとき、交通費のかからない近所の高校でいいと言う親を、先生が説得してくれました。演劇の脚本執筆も勧めてくれて。

　――高校では「不良」だったとか。

　きっかけは、通学定期を買うためのバイトが学校にばれ、とがめられたことでした。どの先生からも、もて余されていたはずです。あるとき、白紙で出した答案用紙の裏に、大正期のアナキスト、大杉栄について書いた。そうしたら聞きつけた国語の先生が「勉強して、ものを書け」と。何度も家を訪ね、気にかけてくれました。

　――でも物書きを志したわけではなかった。

　はい、全然。ずっと後、ライターを始めてからも、小遣い稼ぎのつもりで。

　もし、私がはたちで書き始めたなら、今のような内容のものは絶対に書けていないでしょう。書かなかった時期の長さが滋養になっている、と思いますね。

　■プロでありたい

　――作品からは、一人ひとりの表情まで垣間見えます。無料託児所の責任者のことは「師匠」と。

　自由と平等を両立させようと、理念をもって働く人でした。息子は彼女に育てられたのですが、日々、本当に細かく目配りしてくれているのが連絡帳から伝わってきました。きっちりやる。プロでありたい。彼女に学んだことです。

　物書きの世界には、「書くために生まれてきた」と言う人たちがいる。私は、書くことをそこまで崇高とは考えません。仕事であり職人だと思っています。

　――あれかこれか、を超えた複眼的な書き方は意識したものですか。

　決めつけたくない、とは思いますね。現実は矛盾するものが混然とし、両義的なものであふれている。

　たとえば、傷つけあうことと深く理解することが、結びつく場合もあるじゃないですか。他者が嫌いなのに他者を求める。愚かで負けだとわかりつつ、嫌いになれない……。生きるって、そんなことばかりで。

　――そうした洞察はどこからきたのでしょうか。

　九州のカトリックという私の出自が、一つあるとは思いますね。禁教令の下、表向きは信仰を捨てたものの、捨てられなかった人々の土壌がありました。

　作家の遠藤周作は、『イエスの生涯』で、イエスは奇蹟なんか起こせなかった、つらい目にあい、泣いている人たちに寄り添っただけだ、と書いています。

　高校生だった私は号泣しました。自分の罪を神父に告解して心洗われた経験など一度もなかったのに、そんなイエスなら信じられると思った。救われた気がしたんです。

　無力な人、役立たずな人だからこそ、清らかで美しい。美意識としか言いようのないものがずっとある。

　――「自分はよく間違う」と書いていますね。

　諦念（ていねん）しています（笑）。極端なものをあわせもっていて、さきほど言ったようなロマンティックな志向と、一方では経済への関心がそうなんですが、合理的に考える面。そのあいだを往復しながら、バランスをとって何とか生きてきたんじゃないですかね。

　――今後のお仕事は。

　『ぼくイエ』が若い世代に読まれたことで、ＹＡ（ヤングアダルト）という分野に可能性を感じています。欧米では、政治や社会もテーマなんですよ。

　あと気にかかっているのは、帰国するたび、日本社会が縮こまっていること。

　１００年前の女性運動家たちを調べると、今ある枠組みにとらわれない自由さを感じます。自分を壊し、いい加減さも含めて、しなやかに変わりながら生きていた。それでいいんだと、励まされますよね。

　私も物書きとして、自分を壊し、変わるのを恐れないでいたい、と思います。

　■プロフィル

　★１９６５年、福岡市生まれ。

　★県立修猷館高校卒。セックス・ピストルズが一番のお気に入り。

　★８０年代後半～　日英を往復。

　★９６年～　結婚し、ブライトン在住。日系企業などで働く。

　★０４年、ブログ開始。翌年『花の命はノー・フューチャー』。

　★０６年、長男出産。

　★０７年～　貧困地域の託児所で見習い。保育士資格を取得。

　★１０年～　民間託児所で勤務。傍ら音楽誌「ｅｌｅ－ｋｉｎｇ」などに寄稿。１３年、『アナキズム・イン・ザ・ＵＫ』。

　★１４年、Ｙａｈｏｏ！ニュースで執筆開始。人気を博す。

　★１５年、最初の託児所へ戻るも翌年に閉鎖。経緯にふれた『子どもたちの階級闘争』で１７年、新潮ドキュメント賞。

　★１８年、共著『そろそろ左派は〈経済〉を語ろう』。

　★１９年、金子文子ら百年前に闘い生きた３女性の評伝『女たちのテロル』。『ぼくイエ』はノンフィクション本大賞ほか。

　★５月以降に『ワイルドサイドをほっつき歩け』が出る予定。

　◆次回は藤原書店社主、藤原良雄さんです。ベストセラーではなくロングセラーを。元気のない出版界で、正論を貫き続けられるのはなぜなのでしょうか。